



「人が人を裁くとき」

常務理事 石倉 智史

昨年の今頃は日本中が「見えない小さな敵」に翻弄されていました。今もまだなお、その「敵」は私たちの生活のあり方や人と人とのつながりを脅かそうとしています。

この「敵」とは目に見えない漠然とした不安・怖れのこと、よくよく考えてみると自分自身のことだと気づきます。目に見える数字に一喜一憂し、メディアなどが伝える情報に感化された結果、自分ではない誰かを裁いてしまっていることが多かったように思います。差別や偏見、心無い言動や噂話、「自分は正しい」と信じてしまうこと。どれも私たちの一人ひとりの心の中に潜んでいる「見えない小さな敵」です。これらが集団となると「大きな敵」となって他者を襲っていきます。

ローマの信徒への手紙 14 章でパウロは「信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。」と語りかけます。ここでの「弱い人」とは信仰の面で非常に厳格であり、真面目な人のことをいうそうです。つまり伝統や慣習を大切にしている人たちのことです。物語の中では食べ物をとととして「肉は食べない」と決めている人達がありました。市場で売られている肉は、偶像にささげられた後に売っているものもあるので、その肉は汚れていると

理解しているからです。反面、そういったことに対して神様は自由にしてくださったのだから、「何を食べてもよい」という人たちもいました。「食べない」人たちは「食べる」人たちを批判し、またその逆も同じことが起こっているとパウロは語っています。それぞれがそれぞれの考え方を受け入れられずに「あの人たちはおかしい」と裁いてしまっているのです。

行動の違いというより、その人の態度、つまり心のあり方を問題としているのではないのでしょうか。自分は絶対に間違っていない、間違っているのはあの人だという態度をとったり、相手の無学や無知を蔑んだり、上から目線で評価してみたりといった態度そのものを戒めているのだと思います。

私たちの法人は毎年事業計画を作るとき、年間聖句とともに月ごとに行動指針を定めます。ある年、マザーテレサの遺された「あなたの中の最良のものを」というものを用いました。いろいろなことを行ったときに批判や仕打ちを受けることがあってもやり続けなさいと、最後には自分と他人のことではなく、自分と神様の間でのことだとマザーテレサは励ましてくださっています。

パウロも同じように最後はお互いに「神の裁きの座の前に立ち」「一人一人、自分の

ことについて神に申し述べることになる」と語っています。

くしくも、今の世の中でも宗教や信仰の違いは政治や人々の思想に大きな影響を与えています。戦争やテロ、差別などまだまだ不寛容な社会は世界中にあります。今回の新型コロナウイルスの感染拡大でも世界規模であらゆる価値観、仕事や生活様式の在り方などについて考えさせられることとなったと思います。そこでもあらゆる裁き

や批判もあったのではないのでしょうか。

「見えない小さな敵」は私たちの中にいます。まっすぐに生きることも、寄り道をする 것도、人生いろいろ人それぞれです。人を裁くのではなく、神様に感謝し、信頼して歩みを続ける。そうして最後はみんなが神様の御前に行き着く道を歩んでいるのです。このような大きな安心はないのではないかと考えています。

「一年を振り返って」

ケアハウスるうてるに私が入居したのは、2020年の1月2日でした。お正月で人々は晴れ着を着て、街へお出かけの人も多く見かけました。そんな時私は家族と引越し荷物の片付けをしておりました。その時同じユニットの方がお茶をご馳走して下さいました。とても嬉しく、心細かった気持ちが落ち着いたことを今でも覚えています。また職員の方々も優しく接して下さり、こちらに入居して良かったと思えました。

私が入居したきっかけは毎日の礼拝が行われていることを聞いていましたので、ホームからお電話を頂いてすぐにお返事させて頂きました。一日の始まりが皆様と共に礼拝堂に集い、御言葉を聞き、賛美し、祈る時が与えられ一人ひとりの生活へと押し出されて行くこと、本当に恵まれた日々が与えられており、感謝でいっぱいです。

平日の礼拝は入居の皆さんと交代で司会を努めます。聖日は先生方によって守られていましたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、全てが一変しました。密

ケアハウスるうてる入居者 永吉ミチ子
集を避け、手洗い、うがい、マスクと緊張の日々を過ごすことになり、聖日の礼拝は無会衆でテレビ配信での礼拝へと変わりました。平日は各ユニットにおいて居室での礼拝に変わりました。さくらユニットでは毎日聖書日課に従って5、6人で少々形を変えての礼拝を守りました。

大阪府の緊急事態宣言が解除され、自粛も少々緩くなった3月2日より2階ホールでの礼拝が守れるようになりました。聖日も先生方により対面での礼拝となり共に集えることの素晴らしさも感じております。

コロナウイルスによって外出できない淋しさもありましたが、それほど不自由なこともありませんでした。私たちは毎日美味しいお食事を準備して頂けますし、また特別の日には素晴らしいメニューも予定されております。感謝です。ホームには多くの職員の方々が奉仕下さっています。常に私たちのために気遣って下さり、どのような相談にも応じて下さいます。感染症防止のためには一段と心配りして下さいます。そのことで私たちは安心して生活がで

きています。感謝の気持ちでいっぱいです。

自分の今までを振り返る時、一人暮らしではどこにも行けず、話すこともできず、孤独な毎日だったと思います。今ホームでの生活が与えられている幸せをありがたく思います。この時を与えてくださった神様に感謝いたします。ホームで皆様との出会いは毎日が学ぶことばかりです。最後の

住まいの生活を大切に、神様に守られながら感謝しつつ過ごせたらと願っております。



「新型コロナウイルスの嵐の中で」

特養事業部 木 邨 仁 代

2020 年は、新型コロナウイルスという目に見えない未知とのウイルスとの戦いから始まりました。中国で広がり始めた感染症は、瞬く間に世界中に拡散し、るうてるホームもまたコロナウイルスの嵐の中へと巻き込まれていきました。

るうてるホームは、ケアハウスや特養に入居されている方、在宅サービスを利用されている方、そしてそこで働く職員など、多くの人々が行き交う生活施設です。緊急事態宣言が発令される中であっても利用者様の日常は普段通りに流れ、私達は皆様の生活を支えていかなければなりません。

感染対策を全体で統一していくのは理想ですが、在宅介護と入居施設ではサービスを提供する場やケアも異なり、同じように動いていくには無理が生じます。例えば、在宅サービスの職員はコロナウイルスがどこに潜んでいるか見当もつかない危険の中で働き、入居施設の職員は一旦コロナがホームに入ってしまうとクラスターが発生するかもしれないという緊張の中で働いています。利用者様を守りたいという願いは同じですが意見がばらつき、話しが前に進まないとい

うこともしばしばありました。

状況が刻々と変化して行く中、やがて各々の事業所で現場に応じた対策が講じられていきました。情報は臨時の対策会議や衛生委員会に持ち寄られ、集約を行い課題を検討しました。更には事業部会議で検証が行われ、全体としての対策が講じられていきました。そして、その情報がネットワークや掲示などあらゆる形で全体に発信されてきました。

私達は公開された指針を基本とし、一丸となって感染対策に取り組んで参りました。

2021 年 3 月の今日に至るまで、るうてるホームはコロナウイルスの感染から守られています。しかし、未だコロナウイルスは収束する気配がなく、世界中では今日も多くの方が亡くなられています。緊急事態宣言が解除されたとは言え、明日には何が起こるか見えない不安や緊張感は続きます。しかし、どのような状況にあっても、るうてるホームには同じ思いを持ち共感できる力強い心の繋がりがあり、試練に立ち向かっていく勇気があります。そして神さまは、私達と共にいてくださいます。

